

(5.71), (5.72) と同様にして各波数に対するエンストロフィーを

$$Q(\mathbf{k}) \equiv \frac{(2\pi)^2}{2S} \tilde{\omega}(\mathbf{k}) \tilde{\omega}(-\mathbf{k}) \quad (5.100)$$

と定義すると,

$$Q = \int d\mathbf{k} Q(\mathbf{k}) \quad (5.101)$$

となるが, $E(\mathbf{k})$ と $Q(\mathbf{k})$ の間には以下に示すような簡単な関係がある.

もともと渦度 ω は $\omega \equiv \partial v / \partial x - \partial u / \partial y$ と定義されていたから, そのフーリエ成分には

$$\tilde{\omega}(\mathbf{k}) = i(k_x \tilde{v}(\mathbf{k}) - k_y \tilde{u}(\mathbf{k})) \quad (5.102)$$

の関係がある. したがって,

$$\begin{aligned} \tilde{\omega}(\mathbf{k}) \tilde{\omega}(-\mathbf{k}) &= [k_x \tilde{v}(\mathbf{k}) - k_y \tilde{u}(\mathbf{k})] [k_x \tilde{v}(-\mathbf{k}) - k_y \tilde{u}(-\mathbf{k})] \\ &= (k_x^2 + k_y^2) [\tilde{u}(\mathbf{k}) \tilde{u}(-\mathbf{k}) + \tilde{v}(\mathbf{k}) \tilde{v}(-\mathbf{k})] \\ &\quad - \underbrace{[k_x \tilde{u}(\mathbf{k}) + k_y \tilde{v}(\mathbf{k})]}_0 \underbrace{[k_x \tilde{u}(-\mathbf{k}) + k_y \tilde{v}(-\mathbf{k})]}_0 \\ &= (k_x^2 + k_y^2) [\tilde{u}(\mathbf{k}) \tilde{u}(-\mathbf{k}) + \tilde{v}(\mathbf{k}) \tilde{v}(-\mathbf{k})] \\ &= k^2 \tilde{\mathbf{u}}(\mathbf{k}) \tilde{\mathbf{u}}(-\mathbf{k}) \end{aligned} \quad (5.103)$$

となり(途中, フーリエ成分の連続の方程式(5.67)を用いた), この式は

$$Q(\mathbf{k}) = k^2 E(\mathbf{k}) \quad (5.104)$$

という関係があることを示している.

2次元流体においては, 波数ごとには(5.104)のような関係のあるエンストロフィーとエネルギーが(粘性の効かない場合では)両方とも保存するという強い制約条件のため, 3次元乱流におけるようなエネルギーカスケードの描像は成り立たないのである. もしそのようなエネルギーカスケードが起きたと仮定しよう. エネルギーカスケードの過程では, エネルギーの波数間でのやりとりが本質的で粘性散逸は重要ではないから, エンストロフィーとエネルギーは保存するものとしてよい. ところが, 低波数で注入されたエネルギーがそのま